

## 密教とターラー菩薩

平成廿一己丑年三月廿七日 壁宿金曜  
京都上賀茂・青蓮庵 岩田慈観

### 第一部 ターラー菩薩出開帳・開眼供養法会

ターラー菩薩開眼供養法会次第

#### 一、開眼作法

#### 一、理趣三昧法会

一、四智讃

一、理趣経

一、佛讃

一、諸真言

西部大日如来	オン アビラウンケン バザラダトバン
多羅菩薩	オン ターレー トウッターレー トゥーレー ソーハー
正観音	オン アロリキャ ソワカ
千手観音	オン バザラ タラマ キリク
大師宝号	南無大師遍照金剛
明神宝号	南無大明神
光明真言	オン アボキャベイロシャノウ マカボダラ マニハンドマジンバラ ハラバリタヤ ウン

一、至心廻向

### 第二部 講演「密教とターラー菩薩」

#### 1. はじめに

開眼供養法会について

#### 岩田慈観・プロフィール

東北大学文学部哲学科卒業（印度学仏教史専攻）。卒論のテーマは、近代インドの思想家 Vivekānanda に関する研究。その後北陸先端科学技術大学院大学 情報科学研究科に進学。博士前期・後期課程修了。博士(情報科学)。博士論文のテーマは「感覚遮断環境におけるヒトの心拍変動・脳波ダイナミクスと、意識の状態に関する研究」。学位取得後、生体情報学・脳機能画像(brain imaging)の分野で、東北大学大学院情報科学研究科研究員、東北大学未来科学技術共同研究センター研究員を歴任。脳波計測・機能的 MRI 計測などを用いて脳と意識に関する研究を行う。

2005 年、高野山にて得度。2006 年四度加行成満、伝法灌頂入壇。現在、京都・上賀茂の地にある自坊・青蓮庵にて、正観音並びにターラー菩薩の供養法を修す日々を送っている。

#### 2. 密教とは

##### 密教の特徴

- ・通常、直接知覚することのできない宇宙全体、宇宙の本質そのものを「法身」（絶対的な仏、大日如来）と呼び、身・語・意の三密行を柱とする修法によって、生きてこの身体のままに宇宙の本質＝仏と合一すること（即身成仏、生前解脱）を目指す。
- ・その修法・世界観に、古代インドから伝わるインダス文明以来の非アーリヤ系の伝統や、アーリヤ人系の伝統であるヴェーダ・ウパニシャッドから、日常生活に関わる儀礼、土俗的な呪法、修法を初め、錬金術、占星術、天文学、数学、医学、薬学などの科学技術を取り込んだ。

#### インド密教概史

- ・仏教以前のインド思想
  - インダス文明(紀元前 2300-1800)
  - インド・アーリヤ人の進入(紀元前 1500)
  - ヴェーダ聖典、古ウパニシャッドの成立(紀元前 1200-200)
  - バラモン教の発展

## ・仏教

仏教の成立(紀元前 400 頃)

大乘仏教の成立(紀元前後)

### ・ 初期大乘仏教(1-3 世紀)

般若経類『大般若経』『般若心経』等  
中観派

龍樹(Nāgārjuna)。「空」を説く  
華嚴経類・法華経・浄土経典類等

### ・ 中期大乘仏教(3-5 世紀)

瑜伽行唯識派

如来蔵思想

### ・ 後期大乘仏教(6 世紀-)

密教の成立

## ・ 密教

### ・ インド初期密教(4-6 世紀)

陀羅尼經典・变化観音經典

### ・ インド中期密教(7 世紀)

『大日経』・大悲胎蔵マンドラ

『金剛頂経』・金剛界マンドラ

初期密教から中期密教への展開の特徴([松長 2005]より) :

1. 修法の目的が現世利益から現世における成仏に変化したこと。
2. それまで行者集団の中で別々に萌芽し育てられてきた印契と陀羅尼と精神集中の法が、一元的に把握されて身・語・意の三密を総合する瑜伽の観法として組織化せられたこと。
3. 行者が執行してきた宗教儀礼を仏教教理によって意味づけ、内面化し、象徴化することによって、呪法の仏教化を図ったこと。
4. 個々に信奉されていたバラモン教あるいはヒンドゥー教に出自を持つ神々や、大乘仏教の仏菩薩を仏教思想によって一定の枠組みの中で体系化し、組織を持ったパンテオンを作り出したこと。
5. 經典を説く教主が歴史上の人物である釈尊から、真理そのものを仏と見なす大日如来に変化したこと。

### ・ インド後期密教(8 世紀以降)

金剛頂経系の発展

仏教の聖典が「タントラ tantra」と称される。(それまでは「經典 sūtra」)

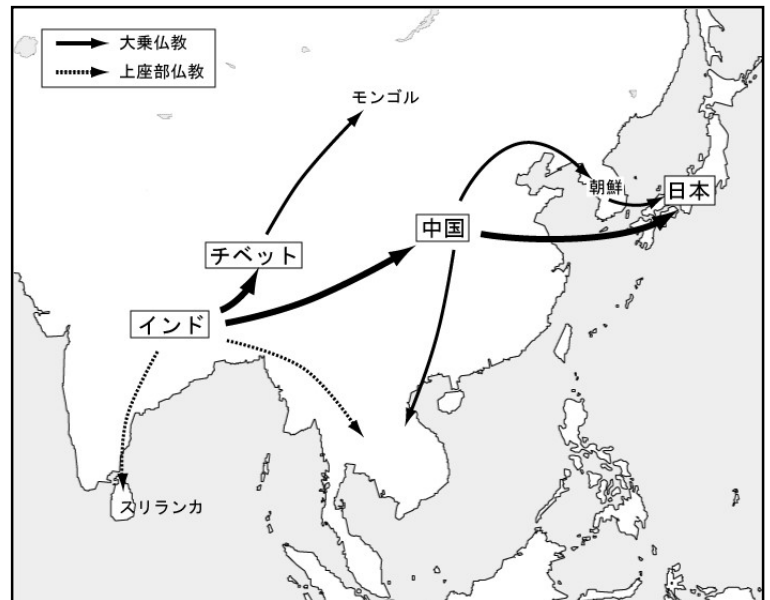
そのため、タントラ仏教、仏教のタントリズムと言われる。

(日本では後期密教は 20 世紀までほとんど知られていなかった。)

後期密教の中期密教と対比しての特質([松長 2005]より) :

1. 忿怒形の仏・菩薩・明王、特に多面多臂像が多くなる。
2. 女性の配偶者を同伴しあるいは男女の仏が合体した父母尊が多くなる。
3. 主尊の交代が行われ、中央の大日如来に変わってマンドラの中心をなす五仏のうち他の四仏のいずれか、あるいは五仏を統括する金剛薩埵などが中尊となる。
4. 殺生・セックスを大胆に容認するといった、通常の倫理や道徳に反する経説が正面切って取り上げられる。
5. 実践面において、人間の生理活動を積極的に応用した修法によって、解脱への道が提示される。そのため教法の秘密保持と、それを伝授する阿闍梨の絶対性をとくに強調する。

日本では初期・中期の密教を継承。チベットでは後期密教が中心的要素。



## 3. ターラー菩薩とは？

### ターラー菩薩とはどんな仏なのか？

#### ・ tāṛā: サンスクリット語で「瞳」のこと。

「観音の眼から放たれた慈悲の光から生まれた」

「観音の慈悲の涙から生まれた」(特にチベットで)

#### ・ tāṛā を「救済する(√tṛ)」と関連づけて「救度仏母」とも。

チベット名の「ドルマ(sGrol ma)」も「救済の女神」の意味。

- ・チベットでは祀られていない家はないくらいポピュラーで民衆にも慕われている仏様。
- ・日本ではほとんど知られていないが、実は少なくとも平安時代から日本にもおられる。

### ターラー菩薩の起源と展開

- ・7c 玄奘『大唐西域記』に、インド旅行の途中ターラー菩薩像を拝見したとの記述あり。
- ・7c 『大日経』に観音院の一員として記述。
- ・初期密教の經典に含まれる変化観音(不空罽索観音、十一面観音、千手観音など)の儀軌に観音の従者として登場。
- ・8c ターラーを本尊とする一尊法の儀軌が存在。
- ・9c スーリヤグプタによるターラー菩薩二十一種讃への註釈。二十一種の尊容の記述。([Willson1986])
- ・11c アティーンシャによるターラー信仰
- ・13c 「ターラー・タントラ」チベット語訳。([Willson1986])
- ・ターラー菩薩の位置づけの変化  
     初期密教における観音の化身の一、あるいは観音の従者  
     ↓  
     観音の徳を体現し、観音に匹敵、あるいはそれ以上に民衆に慕われる

### インドにおけるターラー菩薩

- ・密教の興隆と共にターラー菩薩信仰が興隆を極める。  
     パーラ朝(8c 後半-12c 前半; ベンガル・ビハール地方を支配)時代には観音・文殊などにも劣らぬ信仰を受けたことが造像例からも伺える。仏教衰亡後の今日もヒンドゥー教の女神として信仰されている。([田中 1990])

### チベットにおけるターラー菩薩

- ・チベット名：ドルマ(sGrol ma)「救済の女神」
- ・インドでのターラー菩薩信仰の高揚を承けターラー信仰が盛ん。
- ・吐蕃王国の基礎を固めたソンツェンガムポ王を観音の化身、唐から迎えた後の文成公主とネパールから迎えた後のティツン王妃をそれぞれ白ターラーと緑ターラーの化身とする伝承。
- ・1042 年に入蔵したアティーンシャがターラー菩薩を熱心に信仰。  
     チベットでのターラー菩薩信仰は、吐蕃時代以来という説と、アティーンシャ以降という説あり。
- ・1600 年前後のチベットの著名な仏教学者・ターラナータによる詳細な解説あり。([Willson1986], [Taranatha1981])
- ・ターラー菩薩の様々な尊容
  - ・緑ターラー菩薩  
 招福・財運などの増益法に靈驗ありとされる。
  - ・白ターラー菩薩  
 無病息災など息災法に靈驗ありとされる。  
 両目・眉間と両手両足に合計 7 つの眼を持つ。
  - ・八難救済ターラー菩薩  
 八難：  
 (1) 慢心の獅子  
 (2) 無知の象  
 (3) 瞋恚(怒り)の火  
 (4) 嫉妬の毒蛇  
 (5) 邪見の盜賊  
 (6) 慳貪の枷鎖  
 (7) 貪欲の水波  
 (8) 疑惑の食肉鬼(Picāśa)  
 八難救済の徳は元は観音の徳。  
 参考・『観音經』所説の十二難：  
 (1)火阨\*  
 假使興害意 推落大火阨 (たとえひとが害の意を興して 大きな火の穴に突き落とされても)  
 念彼観音力 火阨變成池 (かの観音の力を念ずれば 火の穴も変じて池と成る)

(2)龍魚・鬼・波浪\*

或漂流巨海 龍魚諸鬼難 (あるいは巨大な海に漂流して 龍魚やもろもろの鬼難にあっても)  
念彼観音力 波浪不能没 (かの観音の力を念ずれば 波浪の中に没することはない)

(3)

或在須弥峯 為人所推堕 (あるいは須弥山の峯にあつて 人に突き落とされても)  
念彼観音力 如日虚空住 (かの観音の力を念ずれば 太陽の如く虚空にとどまる)

(4)悪人

或被悪人逐 堕落金剛山 (あるいは悪人に追われて 金剛山から墜落しても)  
念彼観音力 不能損一毛 (かの観音の力を念ずれば 一毛も損なうことはない)

(5)怨賊\*

或值怨賊繞 各執刀加害 (あるいは怨賊に会い囲まれて 各が刀を執って害を加えても)  
念彼観音力 咸即起慈心 (かの観音の力を念ずれば みなたちまち慈心を起こす)

(6)王難

或遭王難苦 臨刑欲寿終 (あるいは王難の苦に遭い 刑に臨んで命終わろうとしても)  
念彼観音力 刀尋段段壞 (かの観音の力を念ずれば 刀はにわかに段段に折れてしまう)

(7)枷鎖\*

或囚禁枷鎖 手足被杻械 (あるいは枷鎖をはめられ 手足を手かせ足かせをされても)  
念彼観音力 釈念得解脱 (かの観音の力を念ずれば 解け去ってまぬがれることができる)

(8)呪詛・毒藥

呪詛諸毒藥 所欲害身者 (呪詛やもろもろの毒藥に 身を害されようとしても)  
念彼観音力 還着於本人 (かの観音の力を念ずれば 還って本人に着く)

(9)羅刹毒龍諸鬼等\*

或遇惡羅刹 毒龍諸鬼等 (あるいは悪しき羅刹や 毒竜やもろもろの鬼等に遇っても)  
念彼観音力 時悉不敢害 (かの観音の力を念ずれば その時彼らは悉く敢えて害せず)

(10)惡獸\*

若惡獸圍繞 利牙爪可怖 (もし惡獸にとり囲まれて 鋭利な牙や爪をむき出して怖るべき時も)  
念彼観音力 疾走無辺方 (かの観音の力を念ずれば 疾く無辺の彼方に走りさる)

(11)毒蟲\*

虵蛇及蝮蠍 氣毒煙火然 (ムカデ・ヘビ・マムシ・サソリの 毒氣が煙火の燃えるようなときも)  
念彼観音力 尋聲自回去 (かの観音の力を念ずれば その声について自ら帰り去る)

(12)雷大雨

曇雷鼓掣電 降雹澍大雨 (雷が光鳴り響き、 雹が降り、大雨がそそぐときも)  
念彼観音力 応時得消散 (かの観音の力を念ずれば ただちに消散するを得る)

・二十一種ターラー菩薩

「スーリヤグプタ流」(多臂像)と「アティーシャ流」(二臂像)

ターラー菩薩の二十一種の特質を、身色、座、ポーズ、面と臂の数、持物、印契で表現。

(1) 救度速勇母 Pravīra-tārā

Tārā Swift and Heroic

(2) 百秋朗月母 Candra-kānti-tārā

Tārā White as the Autumn Moon

(3) 紫磨金色母 Kanaka-varṇa-tārā

Golden-coloured Tārā

(4) 如来頂髻母 Uṣṇīṣa-vijaya-tārā

Tārā the Victorious Uṣṇīṣa of Tathāgata

(5) 怛囉吽字母 Hūṃ-svara-nādinī Tārā

Tārā Proclaiming the Sound of HŪM

(6) 釈梵火天母 (三界尊勝母) Trailokya-vijaya-tārā

Tārā Victorious over the Three Worlds

(7) 特囉胝𑖀母 (能勝母) Vādi-pramardaka-tārā

Tārā Crushing Adversaries, or Crushing Disputants

(8) 都哩大緊母 Māra-sūdanā vaśitōttama-da-tārā

Tārā Who Crushes All Māras and Bestows Supreme Powers

(9) 三宝嚴印母 Vara-da-tārā

Tārā Granter of Boons, or Tārā Wheel-governing and Granting All Desires

- (10) 威徳歓悦母（降魔世間自在母） Śoka-vinodana-tārā  
Tārā Dispelling All Sorrow
  - (11) 守護衆地母 Jagad-vaśī vipan-nirbarhaṇa-tārā  
Tārā Summoner of All Beings, Dispeller of All Misfortune
  - (12) 頂冠月相母（一切發生母） Kalyāṇa-da-tārā, or Maṅgalāloka-tārā  
Tārā Giver of All Prosperity, or Tārā of Auspicious Light
  - (13) 如盡劫火母（如火焰母） Paripācaka-tārā  
Tārā the Ripener
  - (14) 手按大地母（聖顰眉母） Bhṛkuṭī-tārā  
Tārā the Wrathful Summoner, or Shaking Frowning Tārā
  - (15) 安隱柔善母 Mahā-śānti-tārā  
Tārā the Great Peaceful One
  - (16) 普遍極喜母 Rāga-niṣūdana-tārā  
Tārā Destroyer of All Attachment
  - (17) 都哩巴帝母 Sukha-sādhana-tārā  
Tārā Accomplisher of All Bliss, or Endowed with Bliss
  - (18) 薩囉天海母 [Sita-]vijaya-tārā  
Tārā the Victorious
  - (19) 諸天集会母 Duḥkha-dahana-tārā  
Tārā Consumer of All Suffering
  - (20) 日月廣円母 Siddhi-sambhava-tārā  
Tārā Source of All Attainments
  - (21) 具三眞実母 Paripūraṇa-tārā  
Tārā the Perfector
- （漢訳名は『聖救度仏母二十一種礼讃経 安蔵訳』（大正蔵 20, No.1108）より、  
サンスクリット名・英訳名は[Willson1986]より。）

・長寿三尊

無量寿仏、仏頂尊勝仏母、ターラー菩薩の三尊

・脇侍としてのターラー菩薩

四臂観音

十一面観音

十一面千手観音

## 日本におけるターラー菩薩

- ・日本に伝わる密教：チベットの「古伝」よりも古い。初期・中期密教が中心。
- ・日本の真言密教の展開
  - 空海による日本への密教の本格的導入(「大日経」及び初期の「金剛頂経」を中心とする)
  - 日本式の行法次第の整備：空海の帰朝～院政期
- ・日本密教におけるターラー菩薩の位置づけ
  - ・胎蔵マンドラの一員として
    - 観音院、正観音の西(下)隣。(実は、日本中の密教寺院にターラー菩薩は祀られている。)
  - ・脇侍として
    - 千手観音曼荼羅
- ・諸尊法の中の「多羅菩薩法」
  - ターラー菩薩を本尊とする修法(「多羅菩薩法」)次第が存在。
  - 『秘鈔』『薄草子』『覚禅鈔』『別尊雑記』等(いずれも平安末期)。
  - 日本流の修法次第：空海の帰朝後、平安末期(院政期)頃までに整備。
  - 「多羅菩薩法次第」に描かれるターラー菩薩：
    - 印融法印『諸尊表白集』「多羅尊」より
    - 「(前略) 夫レ大聖多羅菩薩ト者 慈眼視衆生ノ本尊 無縁大悲之聖者也
    - 一子之悲雲ヲ覆フテ普ク法雨ヲ沙界ニ灑ギ
    - 無二之慈眼ヲ廻ラシテ鎮ヘニ哀憐ヲ群生ニ施ス」
    - 浄厳『諸尊表白集』「多羅観自在」より
    - 「(前略) 夫レ大聖多羅菩薩ト者 毘盧遮那心裏ノ差別智印

嚙<sup>バロキテイ</sup>盧吉低眼中所變現ノ尊ナリ  
 諸ノ有情ヲ育シテ安戴スルコト地ノ如ク  
 衆<sup>ハハ</sup>ノ開士ヲ生シテ長養スルコト孃ニ似タリ  
 之ヲ持スル者ハ福祿窮リ無シ 人天ノ供養ヲ受ク應シ  
 之ヲ念スル人ハ威徳最勝ナリ 必ス龍鬼ノ欽承ヲ得  
 自ラ是ノ言ヲ作サク 誰カ生死<sup>ルニヤク</sup>ニ流溺スル我レ普ク齊度セント  
 佛ケ茲ノ讚ヲ説下フ 常ニ悲愍ヲ垂賜シテ世ノ照明トナルト  
 三世最上ノ音ナリ 梵聲甚タ微妙ナリ  
 百千ノ福具足セリ 疾疫永ク<sup>ケンジョ</sup>蠲除ス  
 (中略)  
 聖者ノ悲願永劫ニモ休マス  
 行人ノ義利<sup>ガケイ</sup>俄頃<sup>ネガ</sup>ニ希クハ獲ン  
 乃至大千沙界<sup>コトゴト</sup> 咸<sup>カンリン</sup>ク一味ノ甘霖<sup>ウルオ</sup>ニ沾ハン」

・ただし、独立した尊像の作成例は見あたらず。

チベットにおけるターラー信仰と日本における観音信仰の相似性

日本における観音の中性化・女性化

・言語学的背景：サンスクリット語の性別

Avalokiteśvara: 男性形（「女神」になりにくい？）

Tārā: 女性形

インド・チベットでは、観音は明確な男性尊、あるいは中性的性格

(cf.) ソンツェンガムボ王の二人の王妃の伝承

・日本における観音信仰の展開

・奈良時代の十一面観音信仰の展開

除病の祈願（当時の疫病に対する恐れ）

・光明皇后(701-760)と十一面観音信仰

・女帝・元正天皇(680-748、位 715-724)をモデルとしたという十一面観音

・平安時代以降

・西国三十三所巡礼（伝・花山法皇、実際は院政期以降か？）

・各地の観音巡礼・観音霊場の興隆

・チベットではターラーが持つことになった「慈悲の女神」というキャラクターを、日本では「観音」およびその変化身が担うことになったのではないか。

#### 4. 私と密教・ターラー菩薩

##### 私にとっての「密教」

世界・宇宙の「観測法」あるいは「飛行術」としての密教

壇は言わば「宇宙船のコックピット」

「世界・宇宙の探求者」としての「密教行者」

##### 「青蓮庵」という「場」

青蓮庵の「マンダラ」

諸尊の「フォーメーション」

##### 私とターラー菩薩

観音の「眼」：「五観」（「観音経」所説）

・真観 真理を見据える眼

・清浄観 煩悩に惑わされない清浄な眼

・廣大智慧観 宇宙の本質を知る広大な智慧の眼

・悲観 大悲の眼

・慈観 大慈の眼

「観世音菩薩」＝「観自在菩薩」（玄奘訳）

世界を、本質を自在にみる観音の「眼」の権化としてのターラー菩薩。

「観音・ターラー菩薩を通して宇宙の本質を見据えんとする。」

## 参考文献

- [早島ら 1982] 早島鏡正,高崎直道,原実,前田専学,『インド思想史』. 東京大学出版会, 1982.
- [塚本ら 1989] 塚本啓祥,松長有慶,磯田熙文,『梵語仏典の研究: IV 密教經典篇』. 平楽寺書店, 1989.
- [松長 1989] 松長有慶,「密教經典総説」, In: 塚本啓祥, 松長有慶, & 磯田熙文,『梵語仏典の研究: IV 密教經典篇』. 平楽寺書店, 1989.
- [頼富 2000] 頼富本宏,『『大日経』入門: 慈悲のマンダラ世界』. 大法輪閣, 2000.
- [松長 2005] 松長有慶,『インド後期密教: 上 方便・父タントラ系の密教』. 春秋社, 2005.
- [覚禅鈔研究会 2002] 覚禅鈔研究会,『勸修寺善本影印集成 7 覚禅鈔七』. 親王院堯榮文庫, 2002.
- [東寺宝物館 2004] 東寺(教王護国寺)宝物館 編集・発行,『東寺の大曼荼羅図: 甦るみ仏 花開く美』. 2004.
- [田中 1990] 田中公明,『詳解 河口慧海コレクション: チベット・ネパール仏教美術』. 佼成出版社, 1990.
- [田中 1998] 田中公明,『チベット仏教絵画集成: タンカの芸術 第1巻』. 臨川書店, 1998.
- [田中 2000] 田中公明,『チベット仏教絵画集成: タンカの芸術 第2巻』. 臨川書店, 2000.
- [田中 2001] 田中公明,『チベット仏教絵画集成: タンカの芸術 第3巻』. 臨川書店, 2001.
- [田中 2003] 田中公明,『チベット仏教絵画集成: タンカの芸術 第4巻』. 臨川書店, 2003.
- [田中 2005] 田中公明,『チベット仏教絵画集成: タンカの芸術 第5巻』. 臨川書店, 2005.
- [有賀 2004] 有賀祥隆(監修),『はるかなる憧憬チベット: 東北大学所蔵河口慧海チベット請来品の全貌』. 東北大学総合学術博物館, 2004.
- [Willson1986] Martin Willson, *In Paise of Tara: Songs to the Saviouress: source texts from India and Tibet on Buddhism's great goddess*. Wisdom Publications, MA, USA, 1986.
- [Taranatha1981] Jo Nang Taranatha, Ed. by David Templeman, *The Origin of Tara Tantra*. Library of Tibetan Works and Archives, Dharamsala, India, 1981.(ターラナータ『黄金の鬘と名づけるターラーのタントラの縁起』の英訳)